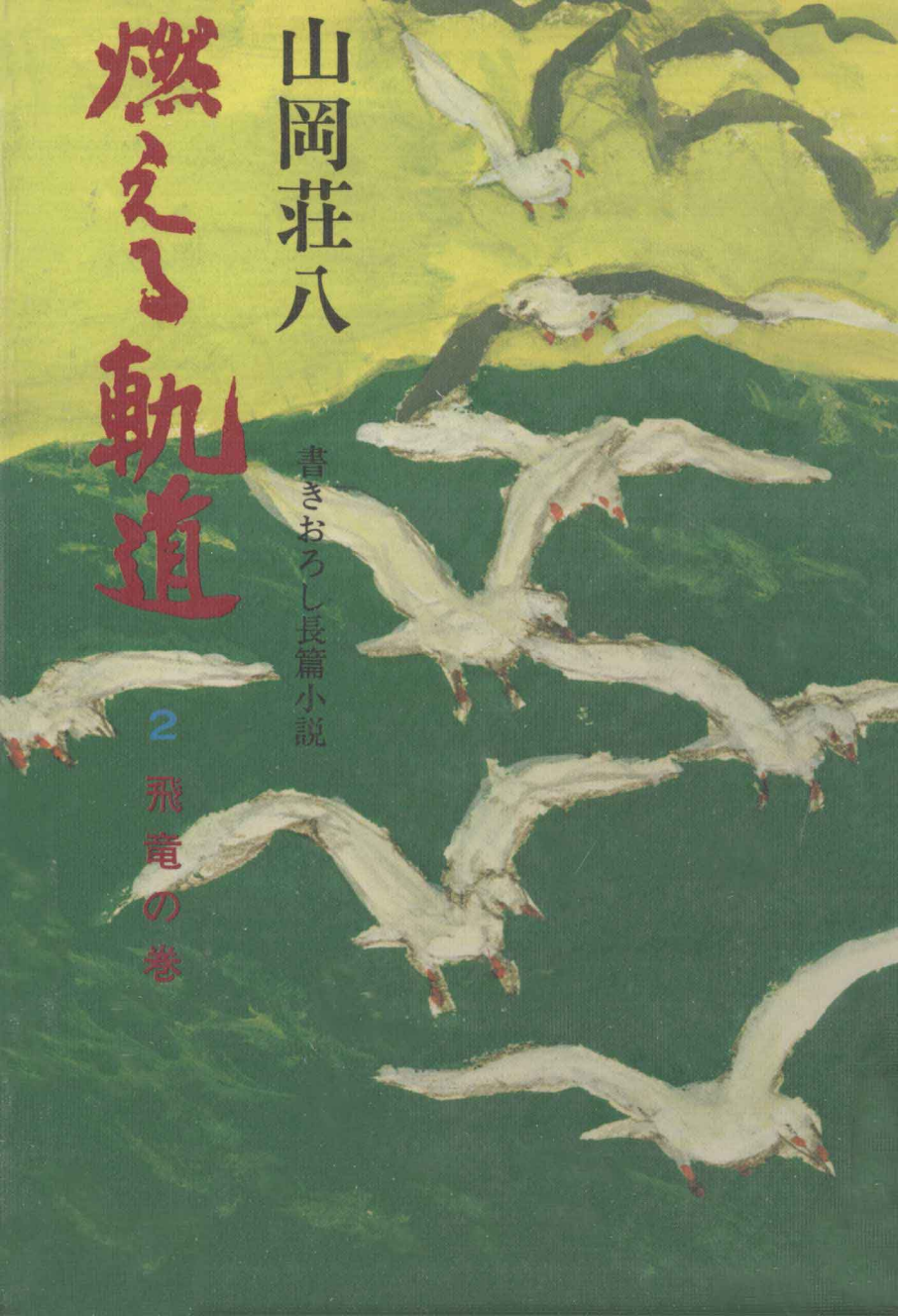
燃える軌道

山岡荘八

書きおろし長篇小説

2 飛竜の巻



軌道

2 飛竜の巻

岡荘八

学習研究社

燃える軌道　第2巻　飛竜の巻

昭和49年12月25日　初版発行

著者　山岡荘八

発行者　古岡　滉

発行所　株式会社 学習研究社

東京都大田区上池台4－40－5
郵便番号　145
電話　東京 720－1111
振替　東京　142930

印刷　壮光舎印刷株式会社
製本　株式会社若林製本工場

編集責任　桜田　満
編集担当　藤原宣夫
編集協力　ダイニチ出版株式会社

©1974　Sôhachi Yamaoka
Printed in Japan

※この本に関するお問合わせやミスなどがありましたら，文書は東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）学研ユーザー・サービス部「燃える軌道」係へ，電話は東京(03)720－1111または東京(03)727－1600へお願いします。

目次

虹消えず 7
英彦山の声 34
転機 44
佳人の奇遇 76
新婚時代 106
新しき出発 137

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

奔馬の如く 168
開く扉、開かぬ扉 220
再出発 264
奔流の如くに 303

装幀・題字　田代光

挿画　田代光

燃える軌道 2

飛竜の巻

虹消えず（一）

千九郎の母のりえには、一人の兄と姉があった。長兄はりえの生れた武信家の当主郡平であり、姉は阿部源三郎に嫁いでいる今日の見舞客とよである。

とよはむろん妹のりえが、瀕死の病床にあるのを知って、あわてて見舞に来たのだが、もう一人の訪客、渋見谷村の林夫人松江は、りえの卒倒を知らずに、千九郎の縁談をすすめに来たのだ。

それだけに二人の訪客は、そのまま人生の明暗を、広池半六の前に描き出して見せることになった。

松江夫人は明るい表情で雨具を脱ぐと、

「ほんに今日は、お日柄もよろしく……」

半ば茫然としている半六の前で祝言を述べた。半六はハラハラした。奥の間では、一足先に着いた阿部夫人のとよが、こんこんと眠っているりえの枕辺へ、放心したように坐っていた。

そう言えば、良人の半六に見せるりえの症状は、まことに異常なものであった。心身ともに使い果したという感じで、今迄に二度死んで、ふしぎなことに二度とも蘇生してみせているのだ。

一度などは、良人の半六もいよいよ息を引きとったものと信じて、子供たちを枕辺に呼び集めた。脈搏はむろん停り、呼吸の機能も完全に跡絶えてしまっていた。

それが、何と言って幼い者たちにその死を告げようかと、オロオロしながら末期の水を運んでみると、呼吸を閉したままのりえが、パッチリと眼を明けて天井を見上げていた。

(死んでも、死に切れないのじゃ……)

それは、一つの奇蹟とも受取れれば、文字どおり全身の凍るような切ない子たちへの執着とも受取れた。

「——どうしたのだ!? 見えるのかッ」

いや、見える筈はない、と半六は思った。あわてて手をかざしてみても、呼吸もせず、脈搏もない……。そのりえに、何うして視力があるものか。若しや、これは、こと切れて自制力の無くなったあとの、うつろな眼筋の弛みなのかも知れない。

それだけに、その眼が静かに焦点を求めて動きだした時には、半六の方が自分の呼吸も止るほどに愕いたものであった。

と、その半六の、今にも割れそうに胸廓を叩きまくる鼓動に誘われたように、コトリ、コト

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.

リとりえの脈搏も蘇った。

「――死に切れないのかッ」

思わず半六は、りえの手を握りしめてその躰をゆさぶった。

「――子供たちのことが心配で、死に切れないのだなッ」

むろん、言葉の反応はあろう筈もなかったが、しかし、それでりえは再び、眼を閉じてこんこんと眠りだした。しかも、そうした事が二度あったのだから、

(もう、助かるわけはない……)

半六は、三度目には、りえも必ず帰らぬ世界に旅立つものと覚悟して、秘かに心で唱名を続けながら看護していたものだ。

現に今日も、半六にしてみれば長男の千九郎を出してやりたくなかったのだ……

(何時、息を引取るかわからぬからなあ……)

そう思うと、せめて千九郎の手で末期の水をと思ったのだが、それを辛うじて押えて、千九郎の言うままに送り出してやったのは、千九郎が、まだ母の「死――」を全然予期していないと見たからだった。

助かるものと信じきっている。その千九郎を、慌てて別離の苦痛の中へ引込むまでもない……そうしたきびしい父の自制で送り出してやったのだが、そのあとへ、皮肉なことに、見舞と祝

言の客が重なりあってやって来たのだ……

半六は、松江夫人の明るすぎる挨拶を聞くと、たまりかねて奥の間のりえの枕辺に戻って来た。

「阿部さん、あなたから、頼みます……」

当然、半六と松江夫人の挨拶は、阿部源三郎夫人のとよの耳にも入っている。

そこで、半六は声を殺して、とよの前で両掌を合した。

「あのお方は、りえが倒れたのを知らずに、千九郎の縁談のことで来ているのです。この通り……お願いします。いまはとにかく……縁談どころでは無いきに、戻って貰うて下され。この通りです……」

虹消えず　(二)

「私は、りえの姉の阿部の女房でございます」

りえよりも幾分若く見える阿部夫人のとよは、りえ以上に武家の匂いを強く残した女房ぶりで、浮々としている松江夫人の前に両手を支えた。

「此度は又、千九郎のために結構なご縁談のことで、遠いところをわざわざお運び下さいまして、お礼の申上げようもございません」

「はい。これは……阿部さまの奥さまでございますか。私は渋見谷の……」

「それは、よう妹から聞いて居りました。はい、それで、妹も張切っていたのでございます。ところが、その妹が、実は、急病で倒れまして、いま次の間で昏々と眠って居りますので」

「あの、こちらの奥さまが……!?」

「はい。全く思いがけないことで……私どもまで、こうしてかわるがわる詰めて居りますようなわけで。はい、本人が快復致しまして、何分のご返事が出来るようになりますまで、このお話、ひとまず延期して戴くより他になくなったのでございます」

りえが一日も早く千九郎の縁談を……そう考えていた「母の希い」の中に何があったかは、姉のとよにはよくわかっていた。

それだけに、言葉と涙がひとつになり、直ぐには顔も挙げ得ない。

松江夫人の頬から血の気と笑いが一度に消えた。とよの言葉遣いと涙から、りえの病状を察したのに違いない。

「あのう……では、お話も、出来ないのでございますか」

「はい。時々気はつきますものの、直ぐまた眠ってしまいますので」

「あのう、私は、お見舞い申上げない方が……」
「お目にかかっても、今のところ、ご挨拶もなりかねますので。現に、姉の私がわかりかねる様子でございます」
そこまで言うと、松江夫人ははじめてそわそわしだした。
「それは存じませんこととて、とんだ失礼を申上げました。そうですか、突然に……」
「はい。過労というのでしょうか。発病までは小さい子供たちの縫物などしていたものが、倒れますとしばらく人事不省で。そのあとは、眠っては覚め、覚めては又眠りつづける……子供が多うございますので、疲れすぎたものと見えます」
「それは、存じませんこととて……」
松江夫人はあわてて一礼して、再び何か言いかけたが、首を振って口を噤んだ。
恐らく、子供が多くて、病因は過労であろうと言ったのが、強く心にひっかかったのに違いない。
そうした過労は、りえばかりでなく、当然嫁いで来る人にとっても、引継いで行かなければならないこの家の宿命と言ってよい。それは女性にとっては一つの恐怖であった。その恐怖が一層ひどく松江夫人を狼狽させたものらしい。
松江夫人は、文字どおり、しどろもどろの挨拶で、門を出る時、戻って来た千九郎と数十歩

の間隔ですれ違ったのだが、それさえ細雨の中で眼には入らぬ様子であった。

千九郎の方でも同様だった。はげしい頭痛と、戸長に対する失望とが、雨に混って全身を苛み続けている。

彼は傘を傾げて門を入ると、足を停めて、五月の雨にけぶるわが家の屋根を睨んでいった。

(人生に徒労はない筈！　いったい自分に、神仏は何が足りないというのであろうか!?)

足音を聞きつけて、父と伯母とが、待ちかねた様子でぬれ縁の向うの障子を開けた。

「千九郎か、阿部の伯母さんが来てくれちょる。お前は学校のことがあるきに、守太郎さんを、暫く手伝いに寄越して下さるそうな」

しかしその言葉の意味も、まだハッキリと千九郎の胸にはとおらなかった。

(戸長の藍原さんも又、ほんとうの教育の理解者ではなかった……)

その失望と、母の病と、はげしい頭痛が重なり合って、千九郎はまだ何を考える心のゆとりも無かったのだ……

虹消えず（三）

千九郎が、しみじみと肉親の伯母の心遣いに感謝したのは、従兄弟の阿部守太郎を、わざわざ旅先から呼び戻して、りえの看護に寄越してくれたときであった。

「――母が、とにかく助けてあげよと言うきに、手伝いにやって来たよ」

千九郎と年齢の近い守太郎は、兄弟そのままの親しさで、

「叔母さんのことはわしに任せて、君はとにかく総集会に行っち来るといい」

阿部守太郎にそう言われるまで、千九郎は、大分県の共立教育会の総集会が、近く大分市であることまで忘れてしまっていた。

「そうじゃ、総集会があったのじゃ！」

「母は、それを君のお父さんに聞いているので、暫く助けてやっち来いというわけじゃ。農業の手伝いはとにかく、叔母さんの看病や、子供たちの食事のお世話は得意じゃないが、君の代りじゃき、真剣にやって見るさ」

守太郎にあっさり言われて、その時はじめて千九郎は我に返った。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.